ＲＰＧＷ（・∀・）ＲＬＤ――ぼくのステキなＤＡ☆天使サマ――

貝塚ゴロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＲＰＧＷ（・∀・）ＲＬＤ――ぼくのステキなＤＡ☆天使サマ――

【Ｎコード】
Ｎ２８３８Ｚ

【作者名】
貝塚ゴロー

【あらすじ】
「突然だが俺は堕天使が好きだ――」
大企業のボンボンが行く、良い子のための堕天使（笑）による異世界譚。
「えっ、この世界ってサザエさん観れないの？　マジで！？」
ノリと根性、ときどき真剣でお送りするハートフルでサスペンス、そんでもってコメディ的なＲＰＧ、始まります。※この小説はＲＰＧＷ（・∀・）ＲＬＤの二次小説です。そしてこれはどこまでいっても作者の自己満足の産物であることを記します。

こだわりを持って、人は初めて強くなれる（前書き）

ハイ、皆さん初めまして。貝塚ゴローです。
この小説は基本的にオリ主視点での話のため、原作主人公達の行動、心情等を詳しく知りたい場合は原作を読むことをお勧めします。
また、「お前前回と今回で話矛盾してんじゃねーか！　クソガッ！」「ハっ、ここ字ィ違ぇから、俺が教えてやんよっ！」等ありましたらコメントフォームにて放出してください。

こだわりを持って、人は初めて強くなれる

俺こと桐条瑠依（きりじょうるい）は万物に対してこだわりと言うものを持ち合わせている。例えば、そう、ボーリングの球だったり、カラオケの機種だったりもそうだ。

歴史上、何か功績を残している人物というものは総じて譲れない何かを持ち合わせているものだ。
こだわりを持つ者は天下を取る、とあの豊臣秀吉も言ったり言ってなかったり。

とにかく、俺はこだわりを大事にする男だ。
そして、それはゲームに対しても同じだ。まず、ゲームを始める前に俺はそのデータを自分に都合の良いように改鋳する。

と言っても原型はなるべく保ったまま気に入らない部分だけを挿げ替えるみたいな感じでだ。
開発者への冒涜だとか、そんなものは関係ない。何度も言うが俺はこだわりを大事にするのだ。

話は変わるが、俺の父さんは大企業の社長だ。桐条グループと言えばそりゃいろんな事業に手を広げている事で有名だ。

大体そこらへんで物を買ってくれれば五つか六つぐらいは桐条の名が入っている事からもそれはうかがえる。親父ェ。

それで今度はゲーム部門にも手を出したらしい。『ギャスパルクの復活』と言う今時捻りも無いネーミングだが、エンパイア社との共

同開発が進められていて、先月ベータ版のテストプレイヤーの募集が始まった。

このソフトのゲーム機は満点堂から出ているＺＩＩで、ハード自体が発売して間もないのである種の人柱要素が含まれていない訳でもない。

このゲームのマーケティングには「細部まで本元見紛うばかりに構築された３Ｄ世界！」「自動生成されるＮＰＣやクエストによって無限に続く冒険！」「物語はあなたが作る！」とか非常にゲーマーの興味を引く文句が並べ立てられてあって、俺は２ｃｈ（ちゃんねる）で袋叩きにされるかと心配していたのだが、予想と反して書き込まれたのはゲームを絶賛するコメントだった。

父さん……スマン。俺、あんたの事疑ってたぜ。

ところで俺もこのゲームを持っている。
別に応募に当選した訳ではない。

兄さんがゲーム開発部門の主任を務めていて、この前ふらりと現れて置いていったのだ。

一応、貰った事だしプレイしてみようとした俺は、データを弄ろうとして手を止めた。どうやら既存のゲームとは違った格納方式が使われているらしく、まずデータが開けない。

ほとほと困り果てた俺は、実家の兄さんのＰＣを漁った。自分のこだわりの為には妥協はしない、これが俺の忍道なのだ。

兄さんは割と仕事を持ち帰る人らしく、ＰＣの中には『ギャスパルクの復活』の開発に使われたツールやら何やらがそのまま残っていた。……それでいいのか主任よ。

何はともあれ、まんまと目的を達成した俺はさっさと改造を始める事にした。

作業を始めると、このゲームの作り込みの深さが感じられた。まず、外装データの種類が豊富だ。何千と揃えられた３Ｄグラフィックはこれだけでどれだけの

時間をかけたのか、開発陣の苦労が窺い知れる。他にも多種多様な職業のデータが陳列されている様は俺の改鋳魂を燃え上がらせた。

俺は三日三晩それこそ一睡もせずにデータを弄り倒し、朦朧とした意識のまま、俺好みに改造した『ギャスパルクの復活』のＲＯＭを片手に床にぶっ倒れた。

●○●○●

三ヶ月後。

あれから俺式改造『ギャスパルクの復活』をプレイし続け、いい感じにキャラクターも育ってきた。

『ギャスパルクの復活』は何百という数の職業の中から一つを選択し、職業（ジョブ）ごとに異なるスキルでもって冒険を進めていくというのが基本コンセプトだ。

戦闘方法はエンカウント方式ではなく、広大なフィールドにスポーンするモンスターをリアルタイム制で葬っていくという点が非常に俺の好みであった。

ちなみに俺の職業は堕天使、このゲーム風に言うのならダテンシだ。

『ギャスパルクの復活』にはそんな職業はなかったが俺が外装やら能力やらをツールで弄って作り上げた。

堕天使こそ俺の正義（ジャスティス）、異論は認めない。

けっして俺が中二病患者であるとかではない。そう、断じてない。

「さーて、今日も熟練度上げに勤しみますかねぇ」

『ギャスパルクの復活』はスキル熟練度制ではないが、俺が勝手にシステムを変更した。ティンときてやった、反省はしていない。

このスキル熟練度制、スキルを使えば使うほど熟練度と言う名の経

験値が溜まっていき、一定値に達するとスキルレベルが上がってスキルの使い勝手が良くなっていくシステムだ。

俺はなにかとキャラクターが成長していくのが大好きなのだ。

他にも俺が勝手に変えたシステムは多々あるが、ここでの詳細は省く。

とにかく、俺は今日もレベル上げとスキル熟練度を稼ぐためにモンスターをひたすら狩っていた。今は春休み前ではあるが、俺の通っている学校は開校記念日と土日が重なって三連休だ。時間はいくらでもある。

「あー、やべぇ。サザエさんの時間じゃん。一旦休むか」

サザエさんは社会によって荒んだ俺の心を癒してくれる。関係ないけどタ〇ちゃんてエコカーのＣＭ出てるよね？声の人。

サザエさん一家が家へと帰ったところで、テレビの入力を変え、再び『ギャスパルクの復活』をプレイし始める。

その後はコンビニに夕飯を買いに行って、食べ終わると直ぐにテレビに向かいなおった。大企業の息子だからって夕飯コンビニで済ませちゃダメとかそんな事はない、断じてない。

ドワ〇ゴが日付が変わったことをお知らせしたところで、テレビの電源を切ってベッドへ向かった。

この日、俺はすんなりと眠りにつく体勢に入ることが出来た。いつもは横になってもしばらくは眠れなかったのだが。

不思議には思ったものの、眠りたいと言う欲求には勝てず、俺は瞼(まぶた)を閉じた。

こだわりを持って、人は初めて強くなれる（後書き）

お疲れ様です。
とりあえず原作一巻ラストまでは大方書きあがってますので、そこまで間隔が空くことはないと思います。

知らない町に来たらとりあえず酒場に行けって、うちのじいちゃんが言ってた。

投下します。

知らない町に来たらとりあえず酒場に行けって、うちのじいちゃんが言ってた。

この日、俺は背に土の感触を感じることで眠りから覚めた。辺りは木々が鬱蒼と生い茂っていて、如何ともしがたい不気味さを放っていた。

「……はい？」

思わず呟いてしまったのもしかたがないだろう。それだけ俺は混乱していた。

考えてみてほしい、寝て起きたら森の中でした、なんてあるか普通？

少なくとも俺はない。

兄さんとのキャッチボールの最中に父さんの大事な壺にボールをぶち当てて粉砕したときもそれはなかった。

なんで俺だけ怒られたかとか、そういうのは気にしない。

とにかく、現状を確認してみない事には何も始まらない。落ち着きに定評のある桐条瑠依（きりじょうるい）は狼狽えんのですよ！これしきの事では。

自分の服装は見た事のない物に変わっている。というのも、白を基調としたロングコートに所々金色の帯で十字に締めてある服で、どっかの格ゲーのキャラが着てそうな服だ。

いや正確には、現実で見た事のない、が正解だ。

俺はこの服を見たことがある――――テレビ画面越しに。

そうだ、この服は『ギャスパルクの復活』で俺のキャラクターが装備していたものだ。

これはあれだろうか、ゲームの世界に訪問しちゃったとか、そういうことだろうか。
だが俺が履いているのは寝るときに足元に置いていた家用のスリッパだ。

しばらくうんうんと唸っていたが、情報が少なすぎてまだ判断は下せない。
どちらにせよ異常な事態であることに違いはない。

どうしようかと悩んだが、こういうときは、まず最初に現地人を探すのがセオリーである。
そこから俺の行動は素早かった。藤岡隊長ばりのサバイバルスキルでもって木々の間を抜け、あっという間に森を脱出することに成功した。

そして、俺は平野にいる。
先程の森を抜ける過程で分かった事だが、この世界は『ギャスパルクの復活』の中である可能性が高い。

森を抜ける道中、俺は危険な生物やらに出会わなかった事で危機感が薄れていたのだが、不意に何かの気配を感じて比較的幹の大きい木に身を隠した。

『ガードアント』。軽自動車ほどの体格を持ったそれは、獲物を捕食するのに使うのだろう咢(あぎと)をガチガチと打ち鳴らしながら、身を隠した俺のすぐ真後ろを通り過ぎて行った。

正直、冷や汗が止まらなかった。人間は自分より大きな生物に対し

て潜在的な恐怖を感じるという事を差し引いても、あの怪物と言ってもいい様相に俺は軽くパニックを引き起こした。

あれから、怪物と遭遇する事なくここに辿り着けたのは運が良かった。

そして、俺は今になってあの怪物の異常さに気が付いた。

まず、何故奴の名称が『ガードアント』だと分かったのか。

俺はあんな生物の名称なんて知らないし、そもそもあんな化け物が地球に生息していたらダスキンは今頃ひっぱりだこだろう、効くかは知らないが。

では、何故か。

ご丁寧に奴の頭上に表示されていたのだ。『ガードアント』、と。

いや、知らない訳ではなかった。俺は奴と対峙したことがある……

これもテレビ画面越しにではあるが。

『ギャスパルクの復活』ではゲームのスタート位置は完全にランダム式に決められる。そして、俺のゲーム開始時の位置はアルダ村というプレイヤー拠点の近くの森だった。

俺のキャラクターがフィールドにスポーンし、さあいくぞ、と意気込んだところで奴にヌッ殺されたのは記憶に新しい。

後にも先にも、スタートした瞬間に死亡するゲームなんてこれきりだろう。

そして、今日目が覚めた場所も思い返すとどことなく既視感があったような気がする。

さらに、モンスターの頭上に名称とＨＰ（ヒットポイント）、ＭＰ（マジックポイント）が表示されていた。
これもこのゲームの特徴だった。

いよいよもってここがゲームの世界であると言う線が濃厚になってきた。
これから帰れるかは別にして元の世界に帰れる方法を探すか、それともこの世界をエンジョイする道を進むか。

どちらにせよ、まずは情報を集めなければいけないだろう。

「……とりあえず、町にでも行きますかねぇ」

●○●○●

あれから長ったらしい道なき道を歩き続けた俺は、眼前に泰然とそびえ立つ門を見上げた。
出発した頃には昇っていた太陽も今は沈みかかっていて、今になってどっと疲れが押し寄せてきた。

この門の先にあるのはメルダの町。それなりに発展しているようで、もう夕方だというのに客寄せの声などが門の外のこちらにまで聞こえてくる。

とにかく、中に入らない事には始まらない、と俺は門の前で槍を片

手に持った衛兵らしき人に話しかけた。

「すんません、旅の者なんすけど。町に入れてもらえます？」

「ん？ああ、構わんぞ。ちょっと待ってろ今門を開ける」

どうやら簡単に入れてもらえるようだ。

俺は軽く礼を言って門を潜った。

さて、何故俺が近くのアルダ村に行かずにわざわざ半日も歩いてこの町にきたのか。

ずばり、情報収集の為だ。古来より情報と言うものは人の多い場所に集まると相場が決まっている。

ドラクエのル〇ーダの酒場然り、なんか教えてくれるだろ？ヒントとか。

そういうわけで、俺は疲れた体に鞭打ちながらも酒場を探して町を歩いていた。いたのだが……この町、広い。

ゲーム画面と現実では物の尺度が違うということを今更ながらに実感した。先程からゆうに２０分は歩いているのだが、酒場の存在する区域には辿りつけていない。

若干辟易しつつも歩き続け、さらに２０分程経ったところで目的の場所に着いた。

この界隈はいくつもの酒場が固まっていて、どこか混沌とした様相を醸し出している。

その中でも太陽をモチーフにした看板を提げた店を見つけ、戸を横に滑らせて店内に入った。

室内はランタンの灯りが怪しく揺れていて、匂いも酒臭い。
店内の各所には丸テーブルが設置されていて、テーブルを囲んだガラの悪そうな男たちが酒をかっ喰らいながら何事かを喚いている。
この酒場は太陽亭と言って、ゲーム内ではプレイヤーに対してクエストを提供する施設だった。俺も序盤の金策では重宝した記憶がある。
この世界においてここがそういう施設であるかは確証が持てないが、確率は高いだろう。
俺はカウンターへと足を進めた。
席に着くと酒場のマスターが不遜な態度でオーダーを取りに来たので、静かに「……酒」と返す。
酒場に来たらこれは外せないだろう、いわゆる様式美と言うやつだ。
……本人が酒を飲めるかどうかは関係ない。未成年だしね。
しばらくすると、店の奥へと行っていたマスターがジョッキを片手に戻ってきた。
スッと俺の手前にジョッキを置くと、一歩下がって洗ったグラスを拭き始める。
まさにテンプレといった行動に俺は興奮を隠せなかった。そう、酒場と言ったらこれだよ！
そのまま酒に手をつけない俺を怪訝に思ったのかマスターが口髭を動かして喋った。
「お前さん……酒は飲まねぇのか？」
見かけ通りの渋い声色でマスターが言った。
俺は迷うことなく言葉を返した。

「旅の者だ、情報を聞きたい」

そういってカウンターに五千G(ゴールド)を置いた。

マスターは僅かに目を見開いたが、すぐに元の憮然とした表情に戻った。

ゲームの中では初期の依頼報酬はおおよそ八千G、命をかける冒険者の一回の仕事量がそれほどなのだから一般人にはそれなりの金額だろう。

それはこの世界でも変わらない筈だ。

ちなみに金は町までの道中で拾った。モラルだとか教義だとかそんなモンは関係ねぇ。

「……して、何が聞きたい？」

ちゃっかりGを懐に回収したマスターが幾分機嫌の良さそうな顔で呟いた。

別にこんな真似しなくても世間話を装ってこの辺りの情勢を聞くだけでもよかった。

ただ俺がこのやり取りをしてみたかっただけだ。

しかし、やってしまったものは仕方ない。ここは一つデカい事を聞いてみよう。

「……金になる仕事を」

知らない町に来たらとりあえず酒場に行けって、うちのじいちゃんが言ってた。

さっさと主人公組に絡ませたいぜぃ。

ＲＰＧって大抵は世界存亡の危機に見舞われるよね（前書き）

ハイ、というわけで投下します。
未だ戦闘描写に入らないっていう異世界の設定を潰す展開がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。

ＲＰＧって大抵は世界存亡の危機に見舞われるよね

あれからマスターに依頼の情報を渡された俺は、依頼人が逗留している宿屋に向かっていた。
この辺の国の事とかを聞くだけのつもりが随分と大きな話になってしまった。

俺が情報を集めていた理由は、この世界と『ギャスパルクの復活』との差異を調べるためだ。
なぜなら、ここが異世界であるにしても、そこが画面越しに知っているものとそうでないものでは今後の活動に大きな違いが出るからだ。

つまり、万が一ここがゲームの中だった場合タイトル通りに『ギャスパルク』が復活してしまう可能性がある。

『ギャスパルクの復活』のストーリは単純なもので、剣と魔法の世界――――エターナルでプレイヤーが『大魔王ギャスパルク』の復活を止めるべく冒険する、といったものだ。

俺はストーリー自体をそこまで進めていないため分からないが、大魔王が復活するのだから確実に良くない事が起こるだろう。

テンプレ的に言えばギャスパルクが復活して世界が崩壊、すなわちゲームオーバーだ。
元の世界に帰る方法があるにしても、それがすぐに見つかるとは思えない。俺がこの世界にいるうちに『ギャスパルク』が復活したとしたら最悪だ。

そして酒場でのシステム面の事もそうだが、ここまでくるとここが『ギャスパルクの復活』のゲームの中であると疑う余地がないように思える。
それはタイトルの『ギャスパルクの復活』が高確率で起こるということを意味している。

となると、俺の取り得る行動は元の世界に帰る方法を探しつつ『ギャスパルクの復活』を止めるべく動く、の2つになる。
別に元の世界に帰るかどうかは決めていないが、この世界……つまりはエターナルが崩壊する事になったときに逃げ場ぐらいあった方がいいだろう。

「でも俺にそんなことできんのかねぇ。自慢じゃないけど俺、一般人(ピー)よ。スペ〇ンカー先生ぐらい役立たないよ」

ゲームの中では一騎当千のキャラクターでも中の人は大したことのない、ただの高校二年生である。
そして、その中の人である桐条瑠依(きりじょうるい)が凶悪なモンスターの跋扈するエターナルで何ができるのか、そもそも俺は生き残れるのか。

まあ、とりあえずは先立つものが必要だろう。件の宿屋の看板が見えてきたことで、俺は一度思考を捨て去った。

●○●○●

どうやら受付には既に話が通してあったらしく、受付は俺の姿を見ると依頼人の部屋の番号を教えてくれた。
あのマスターはアフターサービスも忘れないようだ。

洒落た置物が展示された廊下を進む。目的の部屋は二階の廊下の最奥にあった。
俺は扉をノックした。

「誰だい？　食事なら今日はいらないよ」

聞こえたのは若い女の声だ。どうやら俺を従業員と間違えているらしい。

「……依頼の件についてだ」

こういうのは雰囲気が大事だ。この瞬間だけは俺は必殺仕事人口調で通す。司会の人で。
俺が低い声で返すと数秒の後にかしゃんと鍵の開く音がした。
紳士な俺は勝手に入っていいか迷ったものの、女が入室を促してきたのでゆっくりと扉を開いた。

室内は備え付けの机とベッドが置いてあるだけの簡素なものだった。
それでも、各所に置かれた小物の類は品がよく、女将（おかみ）のセンスの良さを感じさせる。

「あんたが依頼を請けた奴かい？　ひょろっちいけど……大丈夫か

ねぇ」

俺が視線を窓のほうに向けると、女がこちらに獰猛な笑みを返してきた。
頭上に表示されている名前は『マリー』だ。
腰に長剣を提げているところをみると冒険者なのだろうか？

「へぇ、『キール』か……。“あいつ”と一文字違いなんていると
こにはいるもんだね」

俺はマリーの言葉に疑問を覚えた。“あいつ”という人物に対して
ではない。
何故、俺のニックネームを知っている？
酒場のマスターにも名前は聞かれなかったことから、おそらく服装
の特徴を宿に連絡したのだと思っていた。
だからこそ受付は俺の姿を見て部屋へと促したのだと……。

そこまで考えて、マリーの視線が俺の頭上に向かっている事に気が
ついた。
ん？　頭上……？
俺は机の上に置いてあった鏡を見て驚愕した。
んじゃこりゃぁ！？

鏡に映った俺の頭上には、『キール』というキャラクターネームと
赤と青のラインが二本表示されていた。

そうだ、『ギャスパルクの復活』の中ならあって当然だろう！　な
んで気がつかなかったんだ！
メルダの町に来ることだけに頭がいっぱいで自分の事に全く目が向
いていなかった。

そしてマリーが言った『キール』と言う名前。俺が自分の名前をもじって作った俺のキャラクターの名前だ。
なるほど、ということは、だ。俺はエターナルにおいて桐条瑠依（きりじょうるい）ではなく『キール』だ。
つまり、俺は自分が育てた分身の魔法や技を使える可能性が高い。

「どうしたんだい？　ボーっとしてるけど、本当に依頼を任せて大丈夫なんだろうねぇ」

思考の渦に呑み込まれた俺は不意にかけられたマリーの言葉によって現実に引き戻された。

「ああ、少し考え事をしていただけだ。仕事の説明を始めてくれ」

俺は努めて平静を装って言った。このマリーという女、自然体でいるにも関わらず刃（やいば）のような鋭さを感じる。
マスターに要求した「金になる仕事」に該当する依頼だけあって危険度は相当なものだろう。
だが、俺は依頼そのものよりマリーにたいして脅威を感じた。どちらにせよ油断はしない方がいいだろう。

「今回の依頼はある人物の誘拐だよ。……と言っても誘拐自体は私の部下がもう成功させちまってるからねぇ。すぐにでも依頼の紙は取り下げるつもりだったんだよ」

やはり、高額報酬だけあって碌な内容ではない。
俺は別に酒場のやり取り自体に興味があっただけで、悪人プレイがしたい訳じゃねぇっつうのに。

それに、マリーは既に依頼の件は達成されたと言った、それなのに俺をこの部屋に通したという事は別の目的があるのだろう。

「では俺をここに呼んだ理由はなんだ？悪いが俺も暇じゃない、用がないのなら帰るぞ」

虚勢ではあるが俺は冷然とした態度を崩さなかった。

「まあ、そう慌てないで。そうだ、一つ面白い話をしてあげるよ。今回の依頼に関係はあるからねぇ」

俺の返答を待たずにマリーは語り出した。顔には依然凶悪な笑みが張りついたままだ。

「あたしが出した依頼ってのはね、このエターナルに大悪魔を復活させるための下準備のことさ。なんでもその大悪魔ってのがギャスパルクって名前でね、エターナル各地に点在する七柱の魔神の封印を解かないとならないらしいんだよ」

「実に荒唐無稽な話だな。今時子供でももっとましな話を思いつく」

声色には表れなかったが、俺の内心は戦々恐々としていた。この女、今なんて言った？確かに『ギャスパルク』と言っていた、復活させるとも。

まずい。

非常にまずい。

俺が恐れていたことが現実のものとなった。

既に『ギャスパルクの復活』へのカウントダウンが始まっていた。
さらにマリーの言に部下という単語も聞こえた。となると複数人、もしくは組織的な規模で計画が進められているはずだ。

「まあ、疑うのも分かるけど全部事実さ。じゃなきゃあんな大金払うわけないだろう」

「話を続けるよ」と、マリーは言を紡いだ。

「その封印ってのが厄介でねぇ。封印を解くための呪文が必要なんだけど、呪文は守護を務める神官しか知らないんだよ。ここまで言えば分かるかい？」

マリーは口元を三日月型に歪ませて愉快そうに問いかけてきた。その姿は狂気に満ちているのに、どこか蠱惑的だった。

「……誘拐したのはその神官という事か？」

「正確には神官の娘だけどね。今は部下が洞窟の最深部で封印を解く呪文を聞きだしているところさ。……ただ、その部下ってのがどうにも鈍臭くてねェ、あたしとしては不安なんだよ」

「要件を言え、お喋りに付き合う暇はない」

俺はすぐにこの場を離れたかった。
マリーの発する狂気によって部屋の空気が濁っているように思えた。

「つれないねぇ、まぁいいさ。あんたへの依頼ってのはアルダ村の近くにある魔神を封印した神殿に行って部下の護衛をしてもらうことさ。なぁに、頼り無いって言ってもレベルは四十を超えてる、要

するに保険だよ、保険」

「……そうか、では契約完了だ。報酬はあんたからもらえばいいのか？」

「おや、驚かないんだねぇ。エターナルの奴らにとっちゃレベル四十って言ったら英雄ぐらいのもんだろうに」

俺はマリーの言葉に強い違和感を持った。どこか違う場所からこの世界を眺めているような、そんな言い方だった。
まさか、この女！？

「エターナルと地球の人間じゃあ存在そのものの大きさが違うからねぇ。英雄って言っても……あー、あんたに言っても分からないか」

今の言葉で確信した。このマリーと言う女、エターナルの人間じゃない……地球から来た奴だ。
俺以外に同じ奴がいることなど考えもしなかった。

原因はやはり『ギャスパルクの復活』のゲームだろうか？　それならばギャスパルクの事を知っていてもおかしくはない。
さらにこの口振り、地球から来た人間を特別視したような……。

予想だが俺がエターナルにおいて『キール』であるように、こいつ等も自分の分身（キャラクター）の力を持っている筈だ。
エターナル人にとっては驚異的なレベルであっても、ゲームをやっていた人間にとってはキャラクターのレベルを引き継ぐわけだから何てことはない、そんな余裕から来た発言だった。
それならば辻褄（つじつま）も合う。

なんにせよマリーに俺が『地球人』だと言うことがばれるのは得策ではない。
幸い、俺の何も知らない事を装う演技と俺がハーフだという事もあってマリーには気付かれていないようだ。
学校で母さん譲りの金髪や日本人離れした顔つきをさんざんバカにされてきたため、俺も自分の容姿は好きではなかったが、このときばかりは感謝した。
とにかく、ここは依頼を破棄してすぐにこの町を離れるべきだろう。
俺はそう思って口を開きかけたが、
「おっと話がずれちまったねぇ。報酬の金は部下に持たせてるよ、持ち逃げされたら堪らないからねぇ」
マリーの言葉によって閉口せざるを得なかった。
クソッ、やられた！
俺の素性については気付いてないようだが、既にマリーの組織に俺が依頼を請けた事は伝わっているだろう。
情報の漏れを防ぐための策か……、おそらく依頼を受託した奴を依頼の完了と同時に一蓮托生にして組織に繋ぐ筈だ。
そして、離別しようとした場合はこいつの仲間達に消されるだろう。
甘かった！　魔神復活なんて事を企む奴らがバカなわけないのに！
こんな事ならノリなんかで依頼を請求するんじゃなかった……、と言ってもこいつ等の情報を知ったのはここに来てからだ、どっちにしろ後の祭りだ。
俺が今打てる最善の手はこの依頼を完遂した後で、こいつ等の組織

とは軽い協力体制という状況に持ち込んで納得させることだ。
どちらにせよこのバカげた計画に参加する事にはなるが、組織への加入よりはましだろう。
こいつらの目的上必ずどこかで殺人を犯す筈だ。
俺にだって人間として最低限の良心ぐらいはある。
例えゲームの中だとしても、限りなくリアルに近いこの世界で人を殺すなんてできない。

そして、ハッと気づく。

考えてみれば地球人が全員こいつ等の仲間という事はない。
恐らく正義感に溢れた奴らは世界の悪へと対抗する筈だ。

ならば俺はエターナルの地球人に接触し、善へと引き込む。
そして、両方の勢力が均等もしくは善が優勢となった瞬間に悪と手を切り、反撃の余地も与えずに一気に潰す。

地球に戻るにしてもエターナルに永住するとしても、こいつ等の存在は確実に俺の邪魔になる。

とにかく今は依頼の達成を目指すしかない、俺は内心で猛った感情を表に出さないように注意して言った。

「……よし。では今度こそ契約成立だ」

「そうだねぇ、ステータスウィンドウを見せて欲しいところだけど……。その様子だと大丈夫そうだね、強いんだろ、あんた」

一瞬、ステータスウィンドウと言われて疑問に思ったが、ここはエ

ターナルなのだ。
おそらくは『ギャスパルクの復活』で出来た事は可能な筈だ。
となればメニュー画面を開く感覚でステータスウィンドウを開ける
という事だ。

だが、俺はステータスを見せようとは思わなかった。
将来敵対する可能性の高い人物に情報は与えたくない。

「……愚問だ」

俺はそれだけ言って部屋を後にした。

ＲＰＧって大抵は世界存亡の危機に見舞われるよね（後書き）

基本的にキール視点でのお話なので想像以上の早さで原作一巻分は終わります。

仄暗い洞窟の底から（前書き）

とりあえず四話目投下します。
読んでる人がいるとかいないとか、そんなん関係ないっていうか俺は自分の楽しみで（以下略

仄暗い洞窟の底から

メルダの町を出る途中で学生服を着た二人組にぶつかったが、俺が話しかける間もなく「すまない」と言って去ってしまった。
おそらく俺と同じで地球から来た奴だろう。追いかけたい衝動に駆られたが、今は依頼を優先しなければならない。
俺はそのまま町を出た。

一日中歩いていたので疲労はピークに達していたが、俺は宿屋で休息を取らなかった。

マリーやその仲間にはなるべく良い心象を与えておきたい。
もっとも、やつらの組織と仲よしこよしがしたいわけではない。来るべきときに備えて俺という存在への注目度を下げておくためだ。
俺だって出来ることなら善人プレイがしたいんだ！　俺は善い堕天使なんだよッ！

そのため俺は疲れた体に鞭打ってアルダ村の方角に向かっているのだ。
だからと言って徒歩で移動しているわけではない。
予想通り、と言ってはなんだが俺は問題なく『キール』の能力を使うことが出来た。

そして、俺式改造『ギャスパルクの復活』のオリジナル職業（ジョブ）であるダテンシの使えるスキルの一つに、テレポートというものがある。
別にドラゴ〇クエストシリーズのルーラみたいに町から町へと一っ跳び、なんていう便利な魔法じゃないし、このゲーム内でダンジョン脱出効果を持つテレポートとも別物である。

ゲーム内では使用するとマーカーが出現してそれを動かした場所に即時移動というなんともピーキーなスキルだった。

俺はスキル熟練度制を組み込んでしまっていたため、スキルレベルが低い頃は本当にキャラクター2、3マス分ぐらいしか移動できなかった。

このスキルを作った俺をもってして役に立たないと言わせる代物であったのだ。

しかし、俺の日々の熟練度上げの成果もあって現在のテレポートのスキルレベルは八だ。

ゲームの中では対して重要なスキルではなかったが、エターナルでは自分の半径五十メートル以内で目視しているのならどこでも瞬時に移動できるというステキ仕様へと変わった。

連続使用を繰り返した場合、理論上はどんな生物、乗り物より速く移動できる。

だが、俺の職業であるダテンシは同じスキルの連続使用ができない。

と言うのも、本来『ギャスパルクの復活』では技スキルだろうが魔法スキルだろうがMP（マジックポイント）の続く限りうち放題のうえ「詠唱？　何それおいしいの？」状態なのだが、俺がMP（マジックポイント）が切れたらスキル使用出来なくなるなんて嫌だ、でもスキル使い放題と言うのも味気ないと考えたために、各スキルにCT（クールタイム）を設けたためだ。

このCT（クールタイム）はオンラインゲームだと良く使われているシステムだと思う。要するに一度スキルを使ったら次の使用までに一定の時間がかかりますよ、という事だ。

そのため俺にはＭＰなんて概念は存在しない。注意深く見てみると、俺の頭上の青いゲージの横にはＭＰではなくＣＴと表示されている。……さり気無さすぎてマリーに気づかれることもなかっただろう。

そしてこのテレポート、スキルレベル八でのＣＴ（クールタイム）は二十秒。
つまりは何が言いたいのかと言うと――――俺は今、テレポートしては走って、ＣＴ（クールタイム）が回復したらテレポートしてを繰り返している。格好（かっこう）がどうだとかそんなものは重要じゃない。そう、絶対に気にしてはいけないんだ。

日はすでに沈んで、辺りは漆黒。
光源は俺の持っているランタンだけだ。
いつもなら寝ている時間だがテレポートで移動した直後に生じる風がとても冷たく感じられて、眠気も覚めた。

そのまま移動を繰り返していると、前方に僅かな明かりが見える。
おそらく、あれがアルダ村だろう。

ゲーム初期の頃は何かと印象深かったのでよく憶えている。当然スタート地周辺の地図もだ。
そして、目的地である封印の洞窟はアルダ村から見て北の林を抜けた先にあったはずだ。

あの林は傾斜が激しく通常の移動手段では通り抜けることはできなかったが、テレポートを使える俺なら最短ルートで辿り着くことも可能だ。
俺はふっと息を吐くと、テレポートを発動し林の方角へと跳んで行った。

●○●○●

林を抜けると、そう遠くない位置に封印の洞窟はあった。
気を抜くとメルダの町からここまでの夜中行軍による疲れがどっと押し寄せる気がした。
眠気はない。長時間に渡って夜の冷気を浴び続けたためだ。
俺はもろもろの不調を極力気にしないようにして、洞窟の中に足を踏み入れた。

洞窟の中は等間隔に松明の土台が置かれていて、俺が近づくと中心から炎が吹き上がり、眩しすぎる光が暗がりを照らした。
さすがゲームの世界だけあってまさにファンタジーだな。

照らされたことで辺りの様子が明らかになる。
内部はどうやら人工物のようで、壁画とでも称すべきものが壁一面に描かれていた。

コツコツと音をたてながらしばらく進んでいくと、不意に横の壁画が血に濡れたように朱に染まった。
赤は生き物のように蠢(うごめ)き、やがて大きな一つの目玉を形作る。
俺が注意して軽く腰を落とすと同時に、目玉の中心から影が沸きだした。

くすんだ色の擦り切れたコートが浮かんでいるようにしか見えないが、フードの部分が赤色に光っていることと頭上に表示されたネームからモンスターだと分かる。

ヴォイドゴースト。ゲーム序盤においては低レベルなプレイヤーの敵う相手ではないが、俺のレベルは七十七だ。塵に等しい。
とはいえ俺にとってこれはエターナルにおいての初戦闘だ。
出来る事ならムードというものを大事にしたい。

そうだ、ここまで結局テレポートしか使ってこなかったんだ。
ここは一つド派手なスキルで蹴散らしてみよう。
テレポートが使えて攻撃用のスキルが使えないことはないだろう。
もしそうだったら本格的にヤヴァイ、わりと切実にゲームオーバーだ。

敬虔な俺の願いに応えてくれたのか、俺がスキル発動をイメージすると足元に光り輝く幾何学な紋様が浮かび上がった。
俺の職業であるダテンシの魔法スキルの発動待機モーションだ。

さらに背からは涅色(くろつちいろ)の光を放ちながら双対の翼が現れる。
堕天使っったら羽だろ？　黒いやつ。

片翼にしなかったことが悔やまれる。あれさえあればセフィ〇スの兄貴よろしくいろいろできたのに……。
しかし兄貴のようにこれで飛べるわけではない、あくまでエフェクト。

そうしている間にも壁から滲み出るようにヴォイドゴーストは数を増やしていった。
だが、問題ない。

足元の魔方陣が一際大きく輝くと、弾けるように霧散する。

「ジャッジメント！」

俺が叫ぶと、群れるヴォイドゴーストを覆い尽くすほど巨大な魔方陣が展開した。

ヴォイドゴースト達は魔方陣の発する光に一瞬動きを止めたが、数秒の後に緩慢（かんまん）な速度で再度こちらに向かってこようとした。

そして、一匹のヴォイドゴーストが魔方陣の下から抜け出る瞬間――――上から降った光線によって消滅した。

改（あらた）めて説明する必要もないと思うが、これも俺が組み込んだスキルだ。

発動までに数秒の溜めが必要となるが、威力は絶大。

それを示すようにヴォイドゴーストは次々と降りそそいだ光に焼かれて数を減らしていった。

まあ、ぶっちゃけテイ〇ズシリーズのジャッジメントそのまんまだ。

なんで堕天使が光属性使えるの？　とか気にしちゃいけない。

俺は善い堕天使なのだ。

なんで技名を叫んだのかにもきちんと理由がある。

どうやらスキルの類（たぐい）はその名称を声に出さないと発動しないらしいのだ。

俺がこの洞窟にくるまでに何度「テレポート！」と叫んだことか。

決して俺が技名を言いたかったわけではないのだ。

スキルのエフェクトが終わると既にモンスターの影はなく、地面にG（ゴールド）が散らばって煌（きら）めいていた。

俺はいそいそと拾い集めにかかった。
別に鼻が尖っているわけではないが、世の中お金は大切だ。
これだけレベル差があったから楽に倒せたが、実際ヴォイドゴースト討伐の適正レベルは四十レベル台だと言われている。
そしてＲＰＧのお約束である弱い敵より強い敵の方がドロップが良い、というのはもちろんエターナルにおいても通用する。
その帰結として、俺の拾い集めた金額は二千Ｇに達していた。

メルダの町の宿屋での一泊が三百Ｇであることから、随分とまとまった額である。
このまま少しＧを稼いでいこうか。

テレポートでかなりの時間を短縮できたから、今すぐマリーの部下と合流しなくても大丈夫だろう。
ジャッジメントのＣＴが回復したことを確認して、俺は洞窟の奥深くへと潜っていった。

仄暗い洞窟の底から（後書き）

ハイ、お疲れ様です。

どうしようもない決意

あれから作業ゲーよろしくヴォイドゴーストをジャッジメントで葬りまくった俺は、今回の狩りの成果を見て顔を綻ばせた。
まず、やつらは合計で二万Ｇもの金を俺に貢いでいった。
無駄遣いをしなければしばらく金策に困ることはないだろう。

さらに、ジャッジメントを使いまくったことで、スキルレベルが一つ上がった。
おかげで現在のスキルレベルは九、発動までの待機時間は五秒とやや短くなりＣＴ（クールタイム）も三十秒ほどにおさまった。

ラッキーなのはそれだけではない。
俺がドロップ品を整理していると、その中に真っ黒な首輪を見つけた。

ペルネの腕輪。ヴォイドゴーストのレアドロップである。
効果は即死・石化無効という破格のものであり、攻略ｗｉｋｉのドロップ報告にヴォイドゴーストからのドロップを確認した旨のコメントが書かれた事があったが、有志達が何万という数を狩っても出なかったことから虚偽だと叩かれた過去を持つ品である。
かくいう俺も頭の沸いたやつが書いたのだと思っていたので、この腕輪の情報ウィンドウを開いた時は驚きのあまり声をあげてしまった。

しかし正直、この腕輪が手に入ったのは運が良かった。
この封印の洞窟に沸くのはヴォイドゴーストだけではない。
恐るべき即死魔法を使用するモンスター、ヴォイドバイパーが出現

するのだ。

『ギャスパルクの復活』というゲームにおいて即死魔法の脅威度は他作品の比ではない。

プレイヤーは傭兵などのＮＰＣを雇ってＰＴ（パーティ）を組み、共に敵と戦うことが出来るがあくまで主人公はプレイヤーのキャラクターだ。

つまりプレイヤーが敵の攻撃を被弾して死亡した場合は即ゲームオーバーとなり、セーブしたところからのやり直しとなる。

カプ〇ンの女神〇生などのシステムに近いだろう。

そしてＰＴを組んだＮＰＣが死んでしまったとき、プレイヤーはもうどうすることもできない。

このゲームには復活するためのアイテム、魔法ともに存在しないのだ。教会に仲間の棺桶を引きづっていっても無駄だ。弔う以外の選択肢はない。

プレイヤー達が即死を防ぐアイテムを求めたのも当然の帰結だろう。この腕輪以外に即死を無効にできる効果を持ったものがなかったことも、それに拍車をかけた。

だが、ここはテレビ画面越しの世界ではない。

理解はしていた事だが、リセットボタンの存在しないこの世界でＨＰ（ヒットポイント）を散らしたらどうなるかと考えて身震いする。

やり直すことなどできないだろう。リセットできないのと同じで、俺には現在の記録をセーブすることなどできないのだから。

俺のいま着ている服には各種状態異常への軽い耐性効果がついているが、自らの即死を完全に防いでくれるこの腕輪とでは信頼度が違う。

可能性を減らすなどでは足りないのだ。

封印の洞窟は三層に分かれていて、俺が一つ階層を降りた三層目からヴォイドバイパーがスポーンする。
マリーの部下がいる最深部には少なくとも三層に降りなければならなかった。
最悪、ヴォイドバイパーとの戦闘を最小限に抑えて護衛対象と合流することも考えていたがそれをせずに済みそうだ。

手に持った腕輪はその重量以上の重みがあるように感じた。
右の手首に通すと腕輪は解けるように消えてしまい焦ったが、ステータスウィンドウを開くと「腕」の欄にきちんと「ペルネの腕輪」と表示されていた。
目には見えないが右手首に触れると、人肌の感触ではない金属特有のつめたさが感じられた。

俺は大きく深呼吸すると、先の層へと続く傾斜を降りていった。
途中で後ろの方から複数の人間の叫び声とどたどたと暴れ回る音がした。
何かは分からないがさっさと合流した方がいいだろう。
俺は幾分早い足取りで歩き始めた。

●○●○●

突然だが俺は男だ。

なにを当然のことを言っているのか疑問だろうが、まずは聞いてほしい。

男にはやらなければならないことと、してはいけないことがあると俺は考えている。

自分の言葉は曲げないこと。

死んだじいちゃんの受け売りで、じいちゃんがいまの政治家を見て思ったんだと。

だが、世の中うまく渡っていくためには嘘も必要なので俺はこの言葉を聞き流した。

じいちゃんも俺の態度を見て無駄だと悟ったのか、若干呆れたようすながらも笑っていた。

しかし次の言葉を発するときにはじいちゃんの顔は引き締まり、八十を過ぎ背が曲がり始めた体からは気のようなものが見えた。

曰はく、

「罪もないやつが痛めつけられているところを見て何も感じねぇような腐った男にはなるなよ」

じいちゃんが死ぬ十日前の言葉である。

じいちゃんはこうも言っていた。

「もし力があるんならそれはおめぇのもんだ、好きにすりゃあいい。だけどな、おめぇがこの桐条源之助の孫なら話は別だ。力のあるやつが弱ぇ奴を助ける、そうやって桐条は進んできたんだ。分かるか？るい坊」

呼吸器を着けられいつくたばってもおかしくない状態ではあったが、じいちゃんの言葉は紛れもなく桐条グループ前会長のものだった。
俺は日常において無報酬の働きを他人に提供するような、デキた人間ではない。
目の前でクラスメートがプリントをばら撒いてしまったとしても、そのまま素通りするような奴だ。

だが、じいちゃんの言葉はそんな俺の胸に染み込むように馴染(なじ)んだ。
俺の内なる心が、とかの中二的な理由か、じいちゃんの最後の言葉だからなのかは分からない。

「おいっ、さっさと呪文の詠唱を教えろ！　俺だって女に危害は加えたくないんだよッ！」

おそらくマリーの部下なのだろう、頭の上にジローと表示された男が何事かを喚いていた。手元には鉄製のナイフがきらりと光る。
ジローの長身でよく見えなかったが若い女性が体を縮こまらせて震えていた。

「い、嫌ですっ！　私は風神ファドラに仕えるアローネ家の神官……これは絶対に教えられません！」

レヴィアと言う名前の薄手の服を纏った少女は、目の前の恐怖にさらされながらも瞳には確固たる意志の光が宿っていた。
ジローはその眼光に怯んだが、手のナイフを振り上げるとレヴィアに怒声を放った。

「う、うるさいッ！　本当に殺されたいのかおまえっ！」

「ひぃっ！」

最初の強硬な姿勢も、実際にナイフを首筋にそえられると砂の城のように崩れ去った。
むしろ俺とそう変わらない筈の少女がそんな態度をとれたことを賞賛すべきだろう。
レヴィアは顔を俯かせた。
口が微かに動いていることからなにかを喋っているようだが、ここからではその内容までは聞き取れない。
やがてジローはレヴィアの首筋に手刀を当てて昏倒させると、懐から取り出したロープで腕と足を縛り始めた。

目の前で行われている現実に、俺の頭で唐突にじいちゃんの言葉がリフレインした。
どうする、俺？
ここでマリーとの契約を履行しなければならないのか？

正直に言う、俺はこいつらの組織に手を貸したくはない。
予想はしていた、マリー達は目標のためには弱者を虐げることも厭(いと)わないと。
ジローはその中ではまともな方だろう。
発言も人を傷つけることを恐れている風だったし、言通りにレヴィアに力をふるったのは気絶させる際の一度だけだ。
もしかするとこいつは組織の中ではしたっぱ、あるいは俺のように詳しい事情を知らないまま巻き込まれたのかもしれない。

ならばジローを説得してレヴィアを解放させ、マリー達に対抗する戦力に加えることができるはずだ。
交渉が難航して戦闘になった場合、一度拘束して再度説得にのぞめば可能性も高まるだろう。

しかし、万が一俺がその選択をした場合の危険度は現状の数段跳ね上がる。
ジローの服装は染めたようなアッシュブロンドの髪にブレザーの制服、つまりこいつは俺と同じ地球人だ。日本人特有の名前もそれを裏づけている。

と言うことは俺の予想通りマリーの仲間には高レベルである地球出身のやつらがいることになる。
俺もその一人であるためにその力はそこらのフィールドモンスターに敗走することがないほどだ。
だが、同じく高レベルのプレイヤーキャラクターが複数で来られた場合は、まずいことになる。
同程度の力を持った者同士の勝敗は基本的に数で決まるからだ。
だからいまはマリー達とは敵対したくはない。

自分の流儀とリスクを天秤にかける。
どうする……どちらを選べば良い！？

すると、悩む俺の視界にはジローが巨大な扉へと歩いていくのが入った。
それはとにかく巨大だった。光で構成されたように眩しく、ときおりラグがはいったようにブレる。
そして、その巨大な扉に阻まれるように、偉容を誇る漆黒の骸骨（がいこつ）が――――そこにいた。
骸骨は骨で形成された口を上下に動かしていた。呪詛を呟いているような様相に俺はただただ寒気を感じた。
マリーの言葉を思い出す――

『あたしが出した依頼ってのはね、このエターナルに大悪魔を復活させるための下準備のことさ。なんでもその大悪魔ってのがギャスパルクって名前でね、エターナル各地に点在する七柱の魔神の封印を解かないとならないらしいんだよ』

『正確には神官の娘だけどね。今は部下が洞窟の最深部で封印を解く呪文を聞きだしているところさ。……ただ、その部下ってのがどうにも鈍臭くてねェ、あたしとしては不安なんだよ』

そうだ、ジローはあれを解き放つつもりだ。
レヴィアが呟いたのも封印を解くための呪文だったのだろう。

……まずい。
直感で分かる、あれを出してはならない。

ジローは扉の前に立つと、すーっと息を吸った。
骸骨は檻から解放されるのを待ちわびるように暴れ出した。

俺は地面を大きく蹴るとジローの元へと疾駆した。

どうしようもない決意（後書き）

次回、勇者サマ登場します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2838z/

ＲＰＧＷ（・∀・）ＲＬＤ――ぼくのステキなＤＡ☆天使サマ――

2011年12月11日09時51分発行